

(2)

ようこそいらっしやいお前さん  
少しドキドキあったけど  
いのちの親さま守ってくれる  
恐れもせずに道で待つ  
僕は朝日の兎太郎

(3)

心悩みのお前さん  
自然の中には悩みなし  
泣かず明るく生きている  
役に立つかと道で待つ  
僕は朝日の兎太郎

(4)

お前も僕も兄弟分  
いのちは一つで結ばれる  
僕は兎でお前は人間  
ぬいぐるみの違いだけ  
僕は朝日の兎太郎

(5)

僕は緑の草を食べ  
お前はお米のご飯食べ  
元気で生きる自然流  
ともに地球の緑の中で  
僕は朝日の兎太郎

私が兎太郎と出会ったのは今から二三年前のことであった。人生やり直しに入ってから



もないころであった。来る日も来る日も山深く分け入って、大自然の中にこの身を発散させ、解放させてありつたけ拡大膨張させて、それは自己からの脱出をするためであった。それを成し遂げられたのも妻の支えがあったからだ。それなくしては何一つできなかった。

妻は毎日毎私に手弁当を持たせて、明るく見送ってくれたのであった。朝に出て夜までに帰宅するという日課であるから大きく県外に出ることは少なかったが、それでも往復二〇キロ位は普通の行程になっていた。そしてその間のことはできる限り記録として残してきた。

待っていた兎太郎もその当初の体験であったが、容易に信じられないようなこうした出会いも意外に多いのであった。この兎太郎はたくましい

までの野性であるし、ましてや、夜行性なのに白昼堂々とほかを避けもせず、こちらから停車してあいさつをするという至近の出会い劇となったのであった。

悩みの最中にあつた当時の私であったが、自然界の、とくに山深い緑の空間によって赤裸々になった自分を反省することができる歳月を体験させてもらっていた。

その当時から今日にかけて、この自分という内面の世界と、現実の外界とは不離一体であるという生命感が育ってきたのであった。さらに多くの出会いと、そこから発する共振共鳴の中で特に思うことは、何と云っても目に見えない力で引き寄せられているエネルギーを感じていたのも事実のことである。

この兎太郎のような共振共鳴感という現象は、日常茶飯に起きているという実感が何の抵抗もなく心に受け入れるようになったのであった。

自分というものが、いつもオーラのような意志性の磁気に包まれていて、自分と思っている思いの判断さえも、第二の自己性に支配されていることを感じた。やはりそれは現実として頻繁に起きていると感じられてならない。言い換えれば、表層的自己意識よりも、深層的自己意識といえる意志性が強くなるという感じである。

たとえばこの兎太郎にだって、何らかの意志性が働いていたと言えるだろうし、また、

私自身を包む何らかの意志性のオーラが、行く先々にわたって、六感的情報の収集をしていたという先導感、決して否定できるものではないと思っっている。

自分の心に添った意志性のオーラが、磁気磁波磁性体となって、予見性の守りを与えてくれるという意志の働きが感じられてならない。表層的な今の自分の思いをナンバーワンとしたら、ナンバーツーともいえる。

深く、極めて広範囲の先見力を持った心があつて、それが、行く先々の守りとなつているといふ実感が強くなつてきている。

だから私の世界からは、偶然という一過性の話ではなくて、きわめて当然のこととして受け入れられることであり、かつまたそれが満ちあふれている現実感が強くなつたともいえる。待っていた兎太郎との出会いも当然の出来事であつたといつてもいい。

今思う表層の心を第一ステージでの心(ナンバーワンの心)としたら、より決定力の強い深層の第二ステージの心(ナンバーツーの心)が守護性の高い魂と言えるだろうし、それは、どなたにも存在する世界だと私は思っている。

第一ステージの心(ナンバーワンの心)、すなわち、今何を思うか、日頃どんな心で生きているのかという今の心の蓄積が、守護性の高い、奥深い第二ステージの深層の心

を引き出す最大の因子だと私は考えている。

端的にはそれは、命に直結でき得るいのちに添った心ではないだろうか。私流に言えば、自己調和心を高めるバランス力ではないだろうか。人の心をいのちに近づけることは、すなわち、予見性の高い心を養うことになると思っっている。

物事を平静に保ち、無心にしていのちの底力に通じる感覚で心を統一する時、何か自分では及びもつかない大きなオーラ、言い換えれば、いのちの磁気磁波磁性とでも言えるようなバリアーの中にいる感じのする時がある。そして、このような精神下にいる時は、共時性現象(俗称・偶然の一致)が多く現れるようである。待っていた兎太郎の話もどちらかといえば、いのちのオーラ(私見では、魂の磁気磁波磁性体)が出やすい精神下にあつたといえる。

また、共時性現象は、やはり精神状況が深くなつていくときに多く出現する現象と考えられる。だから出会いの縁は、無意識の霊魂の世界からやつてくるのだと私は考えている。

さて今一つ、私を待っていた共振共鳴の現象の話を続けてみる。

話は、兎太郎より三年後のことである。無宿の旅も最終盤にさしかかつていた平成元



(一九八九)年五月二十九日のことであった。家を出てからすでに三九日目であったが、秋田県の南部を走行中、自宅に手の届く地域に来ていることを思いつつも、心は迂回することに向けていた。

今走っている県道は三二号線を過ぎて三四号線の山峡を進んでいる。ここから五七号線を七く八キロ行けば国道一〇八号線が東西に伸びている。その丁字路を右折すれば本荘市へ行き、左折すれば雄勝町経由で鳴子温泉に達する。

風の吹くままの無宿の旅であるが、走る方向だけははっきりさせなければならぬ。その方向でさえも私は、半意識的に決定してこれまでの旅をしてきた。今回は帰る家が近いことでわずかの迷い心が出ていた。特に国道一〇八号線が気になった。

妻は一〇月八日生まれであり、一〇八は妻の命数であって、共振性の強い数霊になっている。国道一〇八号線は妻への道といってもよい。右折したなら鳥海山をぐるり半周して二時間もあれば帰宅できる行程にある。だが心は反発していた。左折して鳴子温泉経由で二、三日延長することにしよと決めたのである。ところが県道を五七号線に切り替えないと国道一〇八号線には出られない。その道筋がはつきりしないから、山間で出会った郵便配達員に尋ねてみた。すると、国道一〇八号線は、松ノ木峠で土砂崩れの

ため全面通行止めになっているというのだ。そうであれば左折することはできない。

心の奥では左折して松ノ木峠を越すことに執着している。通行止めに反発する奥の心は渦を巻く。だが、いくらなんでも心の奥で現実を打破することはできない。迷いをためつつ国道丁字路に出て見ると、やはり全面通行止めの看板が目の前に立ちはだかった。

この日も朝食抜きであつてすでに昼も過ぎていた。通れないことがはっきりしたが、まず何か食べなくてはならないから食堂を探すために左折した。松ノ木峠方向に進めたのである。

ところが、数秒走つてからすごい標識を見てしまった。標識には雄勝三二キロ、国道一〇八号、松ノ木峠とあるのだ。



それを見た途端、いのちの電流が全身火花を散らした。妻と二人の人生、越すに越されぬ峠を越すために、もがき続けた錯綜混沌の生きざまが続いている現実の前に、この松ノ木峠は、今通行止めなのだ。越すことができないのだと、足止めされている現実が目の前に立ちはだかった。だがその標識は、妻と私の越さねばならない峠であることを数のいのちが示していた。私は二二日生まれで、妻は一〇月八日生まれの一〇八である。標識は、雄勝二二キロ、国道一〇八号の松ノ木峠ではないか。松ノ木は「待つ気」のひびきではちきれそうになっていた。待っていたぞ、この峠を越すのだぞ、これこそがお前達の越さねばならない人生峠というものだ、と誰かの声が心の奥からオーラとなって守りの光を発していた。一瞬の間にそう思った私は、この通行止めの現実を心の中で白紙に返したのである。行くも行けぬも命の守りの中であると思い、それはそれでいいと決めてまずは食堂を探すことにした。

少し走ったとき、畑の中に赤ん坊を背負った一人の母さんが立っていたから、この辺りに食堂はないかと聞いてみた。すると母さんは、近くにいた娘に聞いていた。

「それ…、あねや（姉さんや）、しょくどうねがど（食堂がないか）」  
すると聞かれた姉さんが

「ほれ、そいんどごさ店ある」  
それを受けた母さんが「すぐそごさ店あつど」と、伝えてくれた。

ここは大自然の真つ口中である。言葉のやりとりも自然流のとうとうとした豊かな流れの会話となっていた。

少し走って私は軽食喫茶の店に入った。ここにも諦めきれない松ノ木峠が押し上げてくるから、何かの情報を得られればと思いい店員に聞いてみた。すると意外な答えが返ってきたのだ。先に一人の客が寄って言うには、小さな車だったから、どうにかこうにか通ってきたが、大変な悪路であって全面通行不能になっているという。どんな車なのか、おそらく単車なのかもしれない。この峠は、雪や雨でも通行止めがよくある林道みたいな道路なのかもしれない。

私は心を決めた。行ってみないで引き返すよりは、行ってみることだと腹を据えて出



かけることにした。通行止め  
を行くから、やはり心の中  
に何かしらのやましきが残った。  
屈折も多く、岩肌が剥き出しの  
悪路の中で、ひとりでに唱え続  
けた般若心経は無心の世界で  
あった。どうにか九合目まで  
に引き上げてくれたのである。  
頂上は目前であるのだが、道  
路は視界から消えていた。そ  
こは崩落現場の岩石の山であった。しかし幸いなことに、右路肩に、ほんの少しだけ無  
理をすれば通れるくらいの幅が開けてあった。下は断崖であった。

作業は今、土砂を少し取り除いたばかりで、その日は復旧の段取りであり、それを終  
えて帰り支度の三人が現場から下山する寸前であった。私は通行禁止を知りつつ上がっ  
て来たことを詫びた。何とか通して下さいとお願いをして、呼吸するのも忘れてそこを

通過したのだ。瞬時のタイミングで峠を越すことができたのである。

越して下さい人生峠

松ノ木峠で待っていた

雄勝へ二二キロの国道一〇八号

私は二二で妻が一〇月八日

松ノ木峠は待っていた

越さねばならぬ夫婦峠

であった。いのちの底から心を見守るご意志の世界。文字的にひびき、数的にひびき、  
色的にひびきて、論しつづける縁結び。

文字・数・色は人類に無くてはならぬ心の表現であり、無ければ一気にタイムスリッ  
プで古代に逆戻りする人類。文字・数・色は現代人類の三種の神器となったのである。

待っていた兎太郎、待っていた松ノ木峠。人生の先々で案内役となる文字・数・色の  
ひびきに乘って、この旅も終わろうとしていた。それは、平成元年「五月二十九日」であった。  
話はずっと後のことになるが、私達は、鳥海山麓に原野開拓をして田畑を作り、稲作  
を始め、その給水の為に井戸を掘ることにした。この辺りは掘っても井戸水は絶対に出



ないと言われていたが、ついに、念願かなって、数百年ともいわれる伏流水が、八三・五メートルの深さから天高く噴き上がったのである。その日が平成一一（一九九九）年「五月二九日」であった。

人生峠の松ノ木峠を越したのも、やはり「五月二九日」のことであった。それは時空を超えて数霊に乗せた意志性を象徴したのだと思っている。底深く、いのちの伏流水の流れは、一本の命の流れとなって魂不滅の流れを示唆したのであったろう。

さらに、その湧水と同時に、天には祝いの瑞雲（彩雲）が七色に輝いたのである。

出会いのご縁の中には、運命をかえるほどの強烈なエネルギーを秘めているものも少なくない。

私たちは生まれ故郷から七六年目にして、それも突然の話から一〇〇〇キロメートルも離れた広島に移って来た。平成二二（二〇一〇）年三月二五日のことだ。それから二一日目の四月一五日の夜八時過ぎのこと、そろそろ落ち着いてテレビでも見てみようか、とスイッチを入れてみたら、画面一杯に懐かしいお方がインタビュアーを受けていた。

そのお方は、元・総理大臣の中曽根康弘先生であった。齢九十二才といわれるが、ピンと背筋を張って、かくしゃくとして、一言一句かみしめるように明快にお話をなされていた。見入っていた終盤のところだったか、ふと、大事になさっておられることはどんなことでしょうか」と尋ねられた時のことだ。中曽根先生は、即座に内ポケットから一冊の手帳を取り出した。ぱっと開いて見せた文

言を目にした私は、これはうれしいことだと胸一杯になった。その文言は、中曽根先生が大切になさっている人生哲学であり、そこには、「結縁・尊縁・随縁」という六文字が書かれていた。そのことを先生は「三縁」と呼んでいた。「縁を生かし、縁を大切にし、人間関係を大切にすること。そして、縁を結び、縁を尊び、縁に従う。それは、温かい人間関係を大事にすることが大切なのだ」と結んでおられた。さらにその手帳は肌身離さず毎日一、二度はご覧になるといふ。私は意を強くして感謝した。

とかく敬遠されがちな神秘世界のことを求め続けている私は、はたと消極的な心がちらつくものだから、ふとスイッチを入れたテレビのご縁で一国の元・総理大臣の座右の銘の人生哲学が「縁の世界」であったことを知り、自分の求め続ける世界を強く誇りに思ったのだ。ここに紙上を借りて、出会いのご縁に感謝する。

今後、神秘の大樹シリーズは、第二巻、三巻、四巻へと続く。すべてが実体験からの話である。できる限りに写真を添えてその証明としていく。いのちの中では何が起きているのか、また、いのちとはどういうものなのか、と果てし



なくつきつめてゆく。

「心と縁と運命」について、いのちの監視下にある靈魂の世界を体験に基づいて開いていきたいと思う。

著者 菅原 茂

### 著者略歴・菅原 茂

昭和九年（一九三四年）山形県生まれ。

山形県立酒田商工高等学校（現・酒田商業高等学校）卒業後、農業協同組合、商社、ダム工事、海中工事、ビル専門防水工事、旅館業、不動産取引業等を経て、自己改革と生命世界（生きる原点・心の原点）と共時性現象について、妻と二人三脚で探索を続けている。その間、鳥海山麓の原野を開拓、一二年間、鶴亀農場を体験。

### 著書

「酒乱（米のいのちが生きるまで）」（株）東京経済。「死んでも生きている―いのちの証し」（株）たま出版。フォトエッセー「いのちのふる里」、「いのちの顔」等。

## 神秘の大樹 I

2011年 1月 1日発行

著者 菅原 茂  
発行所 おりづる書房